
俺たちのクリスマスは戦場でした

うい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちのクリスマスは戦場でした

【Zコード】

N7162Y

【作者名】

うい

【あらすじ】

生まれた時から不幸のどん底とは言えない程度の不幸な人生を送つてきた桜庭琢磨。

彼は、そんな不幸な人生を変えようと、とあるゲームに参加する。——サンタ狩り——。サンタの持つ幸せの袋を手に入れることが目的の単純なゲームだった。彼氏彼女もいない寂しい奴らが集まるこのゲームに参加したのだが、ゲームが始まる数日前に、学校一の美少女に告白されてしまう。

「たつくん、付き合ってください！」

幸せになる前から幸せの絶頂を味わってしまい、戸惑つ琢磨だが、
彼女もゲームに参加すると言い出した。
今更参加を取り消すのも気まずくなり、所詮ゲームだからとタ力を
くくっていたのが間違いだつた……

戦場に幸せは転がっていない（前書き）

2009年のサンタ狩りと云々スレを、自分なりにアレンジしてみました
もちろんサンタは元ネタ通りにチート性能です

戦場に幸せは転がっていない

「く平凡、と言えば語弊がある俺、**桜庭琢磨。**

今まで、ブチ不幸とも言える人生を送つてきた。

財布を落とせば中身を抜き取られて警察に届けられる。

好きな女の子の前で派手に転ぶ。

音楽の授業で、歌のテストで声が出ないなどなど。

不幸のどん底とも言えないのが憎たらしい。そんな小さな不幸ばかり起こる人生だった。

そんな俺がいる此処こそ、

「早く撃て！！ 逃すな！！」

戦場だつた。

もちろん、サバゲー（サバイバルゲームの略称）なんてチャチなもんじゃあ断じて無い。

本当に人が死ぬし、ものホンの銃弾だつて頭上を通り過ぎる。アサルトライフルのAK-47を構える手が汗でびっしょりと濡れていた。ヌルヌルとした感触が気持ち悪い。

「おい、新人！ ボサッとしてんじゃねえ！！ “幸せ”は分けてやらねえからな！！」「は、はいっ！」

恐怖で肩を震わせ、グリップを力いっぱい握る。

先端近くに取り付けられた突起（なんて呼ぶのか分からないけど、ゲームとかで主観視点にした時、敵を撃つ目安になる部分）を敵に合わせる。

俺たちが何と戦っているのかって？

「たつくん」

隣でAK-47のマガジンを取り替えていた同じ年の女の子が、琢磨、つまり俺のあだ名を呼んだ。と言つても、呼んでいるのはこの女の子ぐらいなものだ。

その女の子は、油断すればこんな血が踊り肉が弾ける戦場でも抱きしめたくなるほどの笑顔を浮かべ、こんな人の血が舞い弾丸が刺していくるような危険地帯にいながら呑氣な声をあげる。

「頑張つて、“幸せ”を手に入れようね」

「ぼお～、つと顔が火照つてしまつた。
いけないいけない。見とれている場合じゃない。とにかく撃たないと。」

そういうえば、誰と戦つているのか、だつたつけ？　それは、背中に大きな袋を背負つて、赤い服と帽子を着た――

「くそつ……トナカイが邪魔で当たらねえ……」

白い髪を生やした、と言つても田の前に立つてほとんどがそんなの生やしてないけどね。

「くそ、当たらない……ツ……」

誰でも知つてゐるのに、誰にも信じられていない存在。

「君たちみたいな者達に、“幸せ”は勿体無い」

——サンタだつた。

戦場に幸せは転がっていない（後書き）

クリスマスにはまだ早い？

知らん！！

リア充爆発しろーー！

学校に昔夢見た青春はない

」との発端は数日前の出来事だった。

クリスマスも間近に迎えた十一月某日。

「はあ……」

授業の合間の休み時間。桜庭琢磨はヘッドホンで音楽を聞き、机に伏せていた。

聞いているのは、最近ハマった歌手の『Dear・X・mas』と呼ばれる三人グループの曲だつた。単調なリズムが心を落ち着かせてくれて、一人でいても寂しさを感じさせない。

まるで自分のためにあるような曲だつた。

桜庭琢磨は休み時間も一人だ。だが、決して友達がいないわけではない。表面的な付き合いの友達ならクラスの男子全員が当てはまるほどだ。

なら、なぜこんな状況なのかと言えば答えは二つ。

一つは、固定のグループに属していないからだ。八方美人の人付き合いをしていたら、いつの間にか“ぼっち予備軍”になつていた。一つは、自ら話しかけない人間だからだ。自分から話しかけることと相手が嫌な思いをするんじゃないか、と内心で恐がつてしまつている。だから、相手から話しかかれることで、たとえ嫌われても相手が悪いんだと責任転嫁できる。

人と関わるのが怖い人間だつた。

もともと備わっている不幸と相まって、相乗効果でも生み出しているのかと思うほど話す相手がない。

「んー」

曲が変わる境田でチャイムが鳴った。ヘッドホンをカバンに放り投げ、曲をとめる。

これが、桜庭琢磨といつ男の高校生活である。

放課になると、やはりとか当然とかいうか一人ぼっちだ。帰宅部員なので帰る時間は早い。どこかしらの部活に入ろうかと思うが、こんな時期に入つて居心地の良い部活が思いつかない。なので、今日も駅までの道をとぼとぼ歩いていると、とある女子の後ろ姿が見えた。

「北川冬子……か？」

髪は肩で切りそろえられ、スラリとした体付きが後ろから見ても分かる。そしてその正体は、学校一とも言われるほどの美少女だった。

その冬子は一瞬、こちらを振り返った。すぐに顔を前に戻したが、視線が合つた。

ドキッとする。

ここだけの話だが、冬子と琢磨は幼い時、隣人で、同じ日に生まれたらしい。小学三年生まで一緒に遊んでいたのはおぼろげだが覚えている。しかし、男女間の変な対抗意識に巻き込まれ、そのまま離れて、遊ばなくなり、次第に忘れてしまっていた。

この学校に来るまでは、だ。

すごい美少女がいるぞ、と友達に誘われ着いて行けば、どこかで見知った顔だつた。それが冬子と気づくのは更に数日後になるわけだが。

「あいつの記憶から、俺は消えちまつてんだろ？」「

そう口に出すと、虚しさが心を撫でた。ちょっと寂しい。声をかけるなんて大それたことはせず、そのまま自宅へと直行した。

……。

家に帰れば、やることも無いのでネットサーフィンが始まる。テレビやネットで話題のワードを打ち込む。

今検索しているのは、クリスマスだ。気が早いと思うが、周りはすでにクリスマスの話題一色。他に調べることもないでの、検索を開始した。

「クリスマス、プレゼント、彼女、彼氏……」

検索結果で出てきたワードを読み上げる。どれもこれも華々しいワードばかりだ。

……だんだん腹が立ってきた。
なにが彼女だ彼氏だ。クリスマスごときで浮かれやがって。

「なんだこのリア充履歴は、死ねばいいのに……」

ぶつけどいるのない怒りを声に任せて叫んだ。叫んだと同時に悲しくなった。

肩を落とし、違うワードで検索しようとすると、画面の端に手紙のアイコンが付いた。メールを着信したマークだらう。
そこにカーソルを動かし、中を開く。差出人はオンラインゲーム

で知り合つた友人だつた。

そのオンラインゲームとは、敵味方に分かれて撃ち合ひ、疑似戦争を体感できるというもの。ネットで大人気のオンラインゲームの一つだ。

文面をまじまじと見つめる。

差出人「ケーブル」

よう、マーク

最近調子がいいな！

同じチームメイトとして鼻が高いよ

まあ、前置きはこれぐらいにして、ちょっと話があるんだ
近々、オフ会を開こうと思っているんだが、そのついでに面白い
イベントも見つけたんだ

その名もサンタ狩り

サンタを狩ると幸せが手に入るとかいうふざけたゲームなんだけ
ど、リアルのサバゲーみたいなものらしいんだ
クリスマスイブの前日から三日間なんだけど、暇?
どうだ? 参加してくれないか?

嬉しい相談だつた。

今の生活は、まるで全力で振り続けた炭酸飲料のように刺激が無い。
さすがに舌が痛くなるほどの刺激はお断りしたいが。
なら、だ。オフ会に参加して有意義なクリスマスを過ごしてやろう。

毎年のように一人寂しく眠る生活はこりごりだ。

バイトで稼いだ金もたんまりと残っているし、三日間ぐらいの寝泊まりはできる。

それに、幸せといつも葉にも惹かれた。プチ不幸な自分の慰めぐらいにはなるだろう。

もしかしたら、本当に幸せになるかも。などと淡い期待をしてみる。

そうと決まれば行動だ。すぐさま返事を書く。

誘いありがとうなケーブル
もち参加するぜ！
会えるのが楽しみだよ

なんか、英文を訳したみたいな文章になってしまったなあ。
違和感は大して感じないのでそのまま送信した。

返信はすぐに来た。

マジかよ！
そりゃ良かつた
他のメンバーも来るらしいから、こりゃお祭りかもな
集合場所なんかは次のメールに載せとくわ

「っしゃあ！ オフ会！！」

小躍りしながら部屋を回ってしまつぽじ嬉しかった。
ネット充（ネットで充実している人）ゆえの性か、こいつ話はて
んで舞い込んでこない。

友達の少ない琢磨にとって、生きてきた中で五本の指に入るほど
のビッグイベントだ。

次に連続してメールが届いた。ケーブルの書いていた文章通り、中身は集合場所の地図が貼つてあつた。その内容を携帯に送り、保存する。

普通なら、ここで悪い人に誘拐されるなどのリスクも考えるべきなのだが、浮かれたままへラへラと笑う琢磨は愉快に小躍りするだけだった。

「オフフ会、オフフ会、うれしいなー」

ついには歌いだしてしまつた。

「これだけ上かつた琢磨のテンションを下げるイベントは、その次の日に起る。

▪

いつのよひに、いつまじめに、至つて普通に登校している桜

だが、今日の彼は違った。

「ふつふつん」

軽くスキップをしながら満面の笑顔だったのだ。

校門の前に立つ先生が挨拶してきた。

「うそだ！」

先生の声を遮り、大声で叫んだ。他に登校している生徒の視線が

突き刺さるが、まるで何も感じていない琢磨は、そのまま教室へとスキップしながら歩いていくのだった。

「はあ……」

そんな一大イベントがあつたとしても、学校での琢磨は相変わらずの一人ぼっちだった。

ヘッドホンを両耳にあて、うつぶせ寝をしていた。
ふいに、肩を叩かれた。

「んあ？」

「お呼びだぞ」

肩を叩いたのは友達の田辺ヨシヤたなべ よしづだった。その顔は正きつており、なんだか氣まずやくを感じられる。

何事かと思い、教室の出入り口をチラッと見る。

「……えつ？」

北川冬子だった。

視線が合うと、冬子は朗らかな笑顔をこちらに向けてきた。心臓がハイスピードでピートを奏で始める。

ヨシヤが耳に口を近づけてきて、小声で話してきた。

「なあ、お前。冬子さんに何かしたのか？」

「するわけないだろ」

「それもそうか」

そう言つと、ヨシヤは琢磨から離れ、いつものグループに混ざつ

て談笑始めた。

多少恨めしく思いながらも、頭を切り替えて冬子へと歩み寄る。正面に立つと、余計に可愛く見えた。鼻や耳、顔立ちが全て完璧だし、非のつけどころが無い。

開口一番は琢磨が取る。

「なにか、用ですか？」

「久しぶりだね、たっくん」

教室中の視線が自分たちに集まつた。

……「いらっしゃ、聞いてないフリして『ソソリ聞き耳たててやがつたな。

ちなみに、たっくんといつのは小学生の時の琢磨のあだ名だ。妙な懐かしさがこそばゆい。

しかし、教室中から集まる視線がさすがに辛くなり、冬子の手を引っ張つて廊下に出る。

そのまま誰もいない場所まで連れて行く。

「……で、久しぶり、って？」

「うん、小学校以来だったからね」

えへへ、と笑う顔にいちいちドキドキしてしまう。

いくら幼い時の友達とはいえ、こんな美少女と親しく話してしまつていいのか、と疑問に思う。カツコイいわけでも、『ハニケーション』を取る力があるわけでもない自分が。

「だからね、たっくんに言いたいことがあるんだ」

「脈絡が分からぬけど……」

だから、という言葉を間違つて使つた冬子にシッコもやるおえな

かつた。

その返事がおかしかつたのか、口に手を軽くあてて、おじとやかに笑う。

「そうだね。じゃあ、直球で言ひね

「う、うん」

冬子の声のトーンが落ちたことで、体が強張ってしまった。睡を飲み込むにも心なしか精一杯の力が必要だった。

上田遣いでこちらをじっと見据えてきた。

その潤んだ唇が、そつと動く。

「たっくん、付き合ひてくださいー！」

時が止まつた。

多分、こんな感覚のまま時間が進んでいるんだとしたら、今頃よだれを垂らして、ボーッとしたバカみたいな顔の奴が冬子の前に立つていてると思う。

幸いにも自分の体内時計がスローモーションで時を刻んでくれたおかげで、よだれを垂らすバカは現れなかつた。

それにしても、今冬子はなんて言つた？

「付き合ひてくださいー！」

もう一度聞こえた。

付き合ひてくださいー！ 突き合ひてくださいー？

ああ、剣道のことか、と思考が停止したとしか思えない結論に至つてしまつた。

「悪いけど、俺剣道の経験無いんだよね」

-
?>

卷之三

あれ、おかしかつた？

「突き合つてください、つて剣道の」とじゃないの？」
「ええっ、どうしてそつなるのー？」

一
レキ

「ああ、もう、違うよ、たっくん。付を組んで、二つ三つ出せ

頬を膨らませて怒る冬子可愛いなぐへへ。

おと危ない危ない
ゼンシテ完全は頭が飛ぶかと思つた

「はい！」
交際、俺と冬子が……、交際つづつ！？

冬子の喜嬉とした声と同時に、どけにそんなに隠れていたのか分からぬほどどの数の男子生徒が、そこいら中から飛び出し、襲いかかってきた。

視界が真っ暗になる頃には、すでに俺の意識は無くなっていたのだった。

非リア充の俺にメールテクはない

目を開けて見えた物は、一面の白い壁に、黒い穴が平均的な距離を保つて空けられていた。

背中を伝うふかふかとした感触から察するに、俺は今布団かベッドに寝かされており、見えているのは天井で、つまり今の今まで気絶していたことになるわけだ。

なにが言いたいか、ズバリ言つと。

「「ここ、どこ?」

ボソッと呟く。

右横でバタバタと足音が聞こえ、視界に天井とは違う物が移った。北川冬子の心配した顔だった。

その顔は、さながら飼い犬が風邪をひいて、処置も対応も分からず慌てているみたいだった。真冬だというのに、その顔には一筋の汗が見える。

「大丈夫だった?」

冬子が口を開いた。

大丈夫だった? と言われれば、どこも痛まない体を診て言おう。

「大丈夫……」

思ったよりも声がざらついていた。無理やり作った笑顔も不自然な出来だ。

そんな様子が無理をしているように見えたのか、冬子は腕や肩を掴んで揺さぶってきた。

「ねえ、ほんと? 無理してない?」

「大丈夫……だつて」

起きたばかりで本調子じゃないだけだ。

そんな言葉をカツ 「良く言つてやう」と思つた矢先、冬子は安心しきつた顔で「ほつ」と声を出した。

「良かつたあ……」

あんなことになつた原因はお前にあるだろ、と言文句を付けたくなつたが、ここまで心配してくれた女の子に真顔で言えるほど根性は腐つていらない。

むくつと上半身を起き上がらせて、足をベッドから下ろし、冬子と向かい合つ形になる。

どうして冬子は、俺なんかを好きになつたんだろう?
罰ゲームか、興味本位か、次の彼氏までのツナギか、本当に好きなのか。

「怪我が無くて良かつた、たつくん」

なぜ小学生で終わつた関係が、ここで結びつく?
疑問しか浮かばない。浮かべない。ポジティブに考えるまじつけが分からなくなる。

あの笑顔が、無垢な笑顔が嘘のよつて思えてきた。

「なあ」「ん?」

無意識に声が出た。

「なんで俺なんかに告白したんだ?」

言った。

まだ付き合っているわけでもない。これじゃあ断る風に聞こえてしまつ。

そんな嫌みな質問に、冬子は朗らかな笑顔を浮かべた。

「好きだからだよ」

それだけか?

疑心暗鬼といつのは、こいつ感じなのだろう。

本当に、本当に、何度も言うが本当に、俺は運動も勉強もお金も顔も良くない人間だ。もしかしたら、性格もヒドいかも知れない。いや、告白してくれた女の子にあんなヒドいことを言える時点で、優しい性格とは言えないだろう。

田の前の、まるで女神のように無垢で、天使のよつな女の子は、薄汚い心の俺にソッと手を差し伸べた。

「行こう。午後の授業、始まるよ?」

疑うのがバカバカしくなつた。

そうだ。こんな俺にもモテ期が来たんだと思えばいい。一生分の、いや来世もまとめたようなモテ期が。

来世の俺には悪いが、今世は俺の一人勝ちだ。こんな美少女と付き合えるんだぜ? 勝ち組や。

勝ち組の階段をジロツト機で上がつていくよつな浮かれたテンションのまま、部屋を出る。

「そうだ」

まだ言つてなかつたことがあつた。

「ん？ なに？」

「さつきの返事、オーケーな」

素つ氣なく、別に興味ないような言い方で言つてみた。

そんな返事に、冬子はクスッと笑い、

「ありがと」

ホモでも女好きに変えてしまつんじやないか、と思えるほどの絶世の笑顔をくれた。

もちろん、午後の授業はちょっとした地獄だつた。

クラスメートのほぼ全員がこちらをチラチラと見てはコソコソと話している。

なんなんだ。そんなに俺が学校一の美少女と付き合うのが不満か。ふん、確かに俺は取り柄も無い奴だが、人にはモテ期という物があつてだな……。

と、無性に教壇に立ち、クラスメートの前で説教したくなつた。でも、そんな度胸はどこにもないし、余計にこじれるだけだから放つておく。そうしておけば悪化はしないのだ。

ホームルームが終わつたあと、俺が北川冬子をレイプし、性奴隸にして、無理やり告白させているという実もふたも無い噂がクラス中に広がつた。

……どうしてこうなった。

o

「どうしたもんかねえ……」

無論、冬子の話もあるが、彼女が出来たという幸せを噛みしめている最中の俺に、幸せを掴もうぜ！ などという非現実的な話を持ち込んできたケーブルに、なんて言おうか迷っているところだ。断るのも気まずい。同じメンバーだし、一番中の良い相手だからだ。

なら行くか？　いやいや、彼女を置いて、クリスマスにゲームのオフ会をしている彼氏がどこにいるだろうか。
ならどうする？

「どうあえずまあ、冬子に聞いてみるかな」

休み時間の間に交換していた、携帯の中のメアドと電話番号を探す。

こんばんは
さつそくメールしてみたよ
いきなりで「めんだけど、クリスマスとかつてどうあるの?

こんなもんだが、と送信ボタンを押す。送つてから色々考えてし

まつた。これ素っ気ないんじゃね？とか、顔文字入れた方が良かつたかな？とか。

そんな不安をよそに、一、三分経つてからメールが返ってきた。

ありがとー

クリスマス？ もちろん、たっくんと一緒にこるよ（笑）

やつぱりそう来るか。

俺だつて同じ気持ちだが、先客をむざむざ切り捨てるのも氣分が悪い。

まずは頼んでみるか。

実はクリスマスに、ゲームのオフ会に誘われてるんだけど
一緒に行く？

送信。

……つておい！

「オフ会ってなんだよー。そんな言葉、アイツが知ってるって限らないじゃねえか！」

ケーブルとメールしている時の感覚で返してしまった。
そもそも、なんで彼女連れてオフ会だよ！

「ああ、なんて言おひ……」

背筋に氷水でも垂らされたような悪寒が駆け抜ける。冷や汗が止まらない。

慌てるな慌てるな。ここで慌てりやいけない。ドイツ軍人ははうりたえない。

メールの着信音が鳴った。驚き、肩が跳ねる。

メールを恐る恐る開いた。

オフ会って、『「コーリング アウト アザー』？
たつくんの大好きなゲームだよね

いいよ！一緒に行こ

え、なんで知ってるんだよ。

ちょっと突然としていると、また着信音が響いた。

驚かせちゃったかな

寝言で言つてたからそうなのかな、と思つて（汗
気にしないで！

寝ている時までゲームのこと考へて、もはや俺は病氣なんじやないか？

つていうか、寝言で『「コーリング アウト アザー』って言えた自分に何より驚いた。

もやもやが拭い去れたわけじゃないが、冬子は信用することにする。着いてくれるならそれでいいじゃないか。

日時と集合時間を添え、『そつの？ んじゃ、楽しみにしてる
ね』とだけ送った。

『うん！　おやすみ』という短文が送られてきたのを見届け、携帯を閉じた。

ケーブルには、なんて言おうか。友達と書いておこう。今はそれぐらいしか思いつかない。

両方を取るって、けつこう残酷な選択してしまったかな。

いつして、まるでリーマンが電車の乗り換えをするかのように、俺の運命もまた、違うルートに乗りかかったのだった。

神様がいるんなら心から感謝するね。まあ、幸せを与える人選を完全に間違えたわけだが。

非リア充の俺にメールテクはない（後書き）

メール文の書き方ってこんなんでいいのかな？

伝説の名勇は笑わない（前書き）

主人公最強は当分先

伝説の名勇は笑わない

なんだかんだで冬休みになつた。

終業式が終わるまで、殺し屋を名乗る男子生徒を返り討ちにした
りしたのは、また別の話。

まさか、たつた一言で学園生活が凄惨になるとは予想だに
しなかつた。

冬子を少々は恨めしく思つが、男子生徒たちは俺のことを羨まし
く思つてゐるんだと思うと、嫌な気はしなかつた。

勝ち組。

なんて甘美な響きだらう。

「うん、今なら言えるわ。すばらしきいの世界！」

鼻歌を吹かしながらクローゼットを開ける。

何を隠そう今日はクリスマスイブ前日であり、待ちに待つたオフ
会の日だ。オフ会と言つても、サバゲー会場とホテルを往復するだ
けの予定らしい。

冬子のことは友達なりなんなりで「まかそつ。

「さあて、準備も出来たしい」

服をわざわざ着替え終わり、カバンを担ぐ。

玄関まで階段を駆け下りる。

「あだつ！！」

自分で自分の足を踏み、そのまま下まで落ちる。不幸中の幸いに
も段が低かったため、大きな怪我はない。

「いて。はあ……、なんか、テンションがガクッと下がった」

先ほどまでの浮かれ具合が嘘のよつて肩を落とす。
痛めた足に気を使いつつ靴を履き、扉を勢いよく開けた。

……。

現地集合と言わっていたが、冬子とは最寄りの駅前で会った。俺
より早く来て待つてくれる辺り、面倒見も良さそうだ。

次に、彼女の私服姿を見て、顔が火照った。派手でテカテカした
服でもなく、質素で地味でもなく、じぐじく普通の服装なのだが、
まるでファッション誌に出てくる有名ブランドのように見える。
冬子が俺に手を振った。

「たっくん~」

駆け寄る。

「ごめん、待つた?」

「ううん。今来たどー」

本物の彼氏彼女のような会話をしたこと、つい笑みがこぼれた。
と言つが、本当に彼氏彼女だ。

実感が無く、無性にむずがゆい感覚に襲われる。

冬子も、さつきの一割増しがらいの笑顔を浮かべる。

「じゃ、行こっか

「ああ」

返事をし、肩を並べて歩く。

横から顔を見るが、やはり可愛い。自分にはもつたいないぐらいに。

オフ会の集合場所と思われる公園に着いた。

公園と言つても、小さなカフェが数件経営している大きな公園だ。『じゅれたテーブルやイスも見渡す限りに並べられている。

そのなかの一角に目立つ集団を見つけた。

地図の集合場所と合づ。

恐る恐る、近づいて行つた。

「ん？」

金髪の女の子がこちらを振り向いた。

驚き、肩が跳ねた。見るからに外国人だが、幼さも残つていて、なんといつか、めちゃくちゃ可愛い。

その女の子はこちらを見るなり早足で寄ってきて、いつ尋ねた。

「チーム？」

口調は、アニメなどで見るなまつた日本語ではなかつた。先ほどの驚きのせいで声が詰まつた俺は、首を縦に振つた。

「アカウント名は？」

「ま、マーク……」

「マーク！？」

俺の返答を聞いた途端、金髪の女の子が抱きついてきた。ふくよかな胸がガンガンと当たつていて、ドキドキが止まらない。その金髪の女の子は俺の右頬に軽くキスをすると、碧い瞳で真っ直ぐとこちらを見つめてきた。

「僕だよ僕！ ケーブルさ！」
「け、けけケーブル！？」

ケーブルと名乗る女の子は嬉しさを体で表現し、きやつきやと跳ねていた。そのたびに大きな胸が揺れる。予想外だった。が、確かにケーブルの一人称は“僕”だ。口調もそことなく似ている。

その外国人のケーブルは不思議そうな表情を、俺の隣に向かって。

「こひらさんは？」

冬子のことだらう。

こひらは先手を打つておく。

「ああ、コイツは友だ」彼女です

俺の言葉に冬子がかぶせてきた。視界の向こひらの集まりがざわつき始める。

「へえ、マークつて彼女いたんだね」
「ん、ああ、なんかごめん」
「いや、いいんだ。別に悪いわけじゃないしね

一瞬、寂しげな顔が垣間見えたかと思えば、すぐに笑顔に変わった。

想定していたことよりもアッサリと受け入れてくれたようで、なんだか拍子抜けだ。

山の気候のような突然の変化に戸惑つていると、ケーブルは俺の手を引っ張つてきた。

そのまま引き寄せられ、腕を組む形になる。

「こいつ、マーク！」

もふもふとした胸の感触を味わう。腕から伝わる豊満な胸の感触は、ちょっとした極楽だった。

ハツと我に戻る。冬子に振り向くと、相変わらずの「口」笑顔だった。彼氏が他の女の子に腕組みされてるのを見て、コイツは何も思わないんだろうか。

そんなことは無いはずだ。と思いたい。

「みんな集まってるよ」

連れられた先には、結構な数の男女がこいつた返していた。指折り数えて三十人ほどだろうか。

ただ、だいたい女の子同士が雑談しているだけで、男共は黙つたまま携帯ゲーム機をいじる物がほとんどだった。していなかつたとしても、ボーッとしてるだけ。

思っていたオフ会と、何か違う。

想像していたのは、男女が楽しく会話していて、コスプレする馬鹿とかいて、大騒ぎしているんだと思っていた。

「これで全員？」

ケーブルに質問する。

「うん、全員。君らで最後だ」

短かな返事が来た。

正直、メンバーなんてほとんど記憶していない。覚えているのはリーダーと副リーダー、それにケーブルくらいなものだ。

「そろそろ動こうか、みんな」

男が一人、立ち上がった。

それが合図だったのか、ぞろぞろと席を立ち始める。

見たところ、あの男がリーダーらしい。かなり背の高い人で、顔もなかなかのイケメンだった。

「あの人ガリーダーかな？」

「いや、前のリーダーだね。そして、その正体はその昔、暫定一位を独占し続けてきた伝説の傭兵、オンリー・アタッカ「孤立無援ケージ」

彼がケージか。

チームを立ち上げた途端に姿を消したが、全盛期は「足音を鳴らすだけで殺される」とまで恐れられた名勇。

仲間の支援を受けずにしたキルストリーク（死ぬまでに殺した相手の数）が40を超えたとかいう、チートプレイを疑われるほどの腕前。

「ケーブル」

ケージが声をあげた。

「会場までの案内を頼めるか？」

「あ、はい！」

頼みを聞いたケーブルはすぐに地図を表示し、目的地を指差す。

「ここからすぐですね。行きましょう」

そう言つて、ケーブルが先頭をきつと歩き出した。
遅れないように背中を追つ。

「近いのか」

「そうみたいだね」

動きづらさと思つていたら、いつの間にか冬子に腕組みされいた。

やはり焼き餅はしてくれたんだな、と感動してしまつ。

見慣れない街をキヨロキヨロしていると、ケージがこちらを見ていた。視線が合つとそっぽを向いたが、またすぐにこちらを見る。なんだ？ 何が言いたいんだ？

「あの、何か？」

「ん、いや、君たちが羨ましくてね。すまない」

案外、素直な人らしい。確かに、美少女と腕を組んで歩ける奴を見て羨ましく思うのは当然だと思う。でも、何か引っかかる。

「そうなんですか？」

「……」

「違いました？」

「いや、話そつか迷つたんだ。楽しいオフ会で気を重くされても困るからね。言うのは止めておくよ」

「そうですか」

それからまた、無言で歩く。冬子も腕を組むだけで話しかけて来ない。

自分から話しかけるのをワシとしない自分が、じりじり風に話しかけようか小さな脳みそをフル回転させていると。

「ねえ、たっくん」

冬子が先に話しかけてきた。

「なに?」

「たっくんって、運命って信じる?」

「運命?」

「うん。運命。人が産まれて死ぬまでの予定表があるんだとしたら、信じる?」

「難しい質問だな……」

先手を取られたことは嬉しいが、なんて返答すればいいのか分からぬ質問だつた。

しかし、恋人同士の会話にきこえなくもない。

「運命ねえ。信じたくないな

「どうして?」

「んー。決まっているんだとしたら、なんだか生きることの意味が分からなくなる

「それも運命なら?」

「う、うつむ……」

「そもそも、奇跡で運命を変えられるとしたら、奇跡って必要かな?」

「……、必要なんじやないか? たとえその奇跡さえも運命だとし

ても、俺は必要だと思つ

「どうして？」

「いや、どうしてって言われてもなあ……」

自分でも、なぜこんなことを口走ったのか分からない。

いや、そもそもだ。なぜ冬子はこんな話題を持ち出したんだ。宗教か何かの勧誘だらうか。

電波な質問で、頭の中が洗濯機の中のようにグルグルと渦巻いている。

考えるフリをしながら、ケーブルの地図と格闘している姿を見る。そのケーブルが嬉しそうな声をあげた。

「ありましたありました！」

指差す方向を見ると、古びたゲーム屋があるだけだった。
本当にここなんだろうか。

「なあ、本当にここなのか？」

「うん、間違いないよ。さっそく中に入ひつ」

ケーブルは俺の心配もよそにずかずかと店内に入つていった。

「はあ。さすが我らの“切り込み隊長”」

彼女のチーム間の一いつ話を、ボソッと呟いた。

伝説の名勇は笑わない（後書き）

感想や質問などあれば、お待ちしています

俺がここになにモテるわけがない

先に入ったケーブルの話だと、サンタ狩りが始まるのは晩頃らしい。それまで、自由時間なるものを頂いた。

と言つても、やることが無い。来たことは無いが、どれも見知った店ばかりで景観に新鮮さのかけらもありはしなかつた。

「どうすっかなあ」

灰色の雲で淀んだ空を見上げながら呟く。
すると、横にいた冬子が顔ののぞかせてきた。

「ねえ、暇なうちはへんブリーフリーナー?」「えー」

冬子の誘いでも、あんまり気の乗らない誘いだった。
さつきも書いたが、この辺りには新鮮さが無い。住んでいる町と似ているし、お店だって似たようなところだ。

「めんべい」

「やうや.. じゃあ」

冬子は笑顔を浮かべ、

「性交^{セックス}しようか

「は?」

「ともない」とをさらりと言つた。
疑問で返すが、何も理解出来ていないのでじやない。

ただ、あまりにも唐突すぎたのと、じゃあ性交といつも軽さが分からなかつたのだ。

最近の女子高生はビッチだと聞くが、ここまでなのだろうか。さも清純そうな姿をした冬子ですらこんなことを言うなんて。

「しないの？」

上目遣いで覗き込まれる。

確かにしてみたいさ。思春期だからな。こんな美少女とヤレるなら魔法使いなんてならなくていい。

俺が返答に困っていると、冬子が右頬に人差し指を当て、左右非対称な顔をした。左目を閉じ、口の右端を吊り上げた奇妙な顔だ。

「場所とか気になる？ なら、近くにラブホテルあるし、お金もあるから大丈夫だよ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

付き合つて一ヶ月も経たない仲だぞ？ 小学校で遊んでた程度の交友関係だぞ？

つか、昼間だし。

俺の中で、理性と名乗るヒーローが欲望といつも悪党をひらいている。

「ふふ、小学生の時は積極的だったのにね。ファーストキスだって、たっくんに奪われたのに」

「そうだつたつけ？」

「舌だつて入れてきたしね。胸も触られたよ～

「う、嘘だろ！？」

「ふふ、ジョーダンだよ～」

ジョーダンで良かつた。

小さな時から変態なのかなと心配した。

「だから、ファーストキスの時みたいに、今度も私の初めてを貰つてね」

恥ずかしげもなく、よく堂々と言えるなあと内心で感心していた。初めて、か。

「冬子は俺以外に付き合つた奴つている?」

「いないよ。たつくん一筋だもん」

「一筋? もしかして、小学生の時からか?」

「うんつー!」

そこまで惚れられてるんだ、と知ると照れてしまつ。

でも、当の本人である俺はそこまでの感情を持ち合わせていない。俺の冬子に対する好きは愛してるという意味じゃない。可愛いからとか、綺麗だとか、そういう外面向的な意味でのものだ。

ゆえに、性的な意味でしか見ていない。

長年の願いが叶い、俺と付き合えた冬子だが、まだ片思いのままだ。

自分で自分が許せない。冬子の気持ちにそえない自分が。

「で、する? しない?」

「冬子はしたいのか?」

「したいよ、たつくんと」

「俺も……したいけど……」

理性が押されている。頑張れ俺の理性。

「したい」……「けど」……

「じゃあ行こう」

「う、うん」

——理性さんがログアウトしました。

「ビ」に行くの~?」

その声と同時に腕を組まれた。やつを感じた柔らかい感覚がよみがえる。

顔を向けると、ケーブルだった。

「け、ケーブル!?

「やん。ケーブルじゃなくて、僕の名前はアリスだよ?」

「はえ? あ、アリス?」

おどき話かよ、ヒツジコミたい。

だが似合わない名前でもない。あんなヒラヒラのスカートがついた服なんか着ると、とても似合いそうな容姿だ。

今のアリスの格好は、編みセーターにジーパンといつ男っぽい格好だ、

「ね、マーク。着いて行つてもいい?」

アリスは頭を俺の肩に乗せ、猫なで声でねだつてきた。
更に次は冬子がアリスの真似をして頭を肩に乗せる。

「たつくんは私と“一人”だけで行くんだもんねー」

二人、といつ単語を強調させる言い方だった。

「僕たつてマークといたいわ。あ、そつ言えばマークの本名教えて

よ」

「さ、桜庭琢磨……」

「琢磨だからたつくんなのか。じゃあ僕もたつくんって呼ぶよ

「むつ」

冬子が頬を膨らませる。もしかして、頬を膨らませるのは、怒った時の彼女のクセなのだろうか。

「たつくんは私だけが呼ぶもん」

あー、モテモテだな、俺。

来世のモテ期まで使つてゐるんじゃないかと思つたが、再来世の分まで使つてゐなこりや。

すまん、来世と再来世の俺よ。存分に堪能させてもいいわ。

「三人で仲良く行こう、な?」

原因である俺が一人をなだめる。

潔く一人は身を引き、喧嘩を止めた。

「たつくんがそう言つなら、私はいじよ」

「僕も賛成!」

かくして、俺は清純黒髪美少女と、金髪壁眼巨乳美少女の二人に挟まれ、ありきたりな町の観光をすることになつた。

モテる男はつらいの意味がやつと分かつたよ。モテすぎてもしないだけだな、こりゃあ。

……。

豪華なホテルのような一室の中、二人の男女がいた。

「今回が本番か」

サンタの衣装を着ぐすし、胸元のチャックを全開にした筋肉質の男が、ふかふかのソファーに座りながら言った。開かれたチャックの下には、黒いシャツがぴっちりと張り付いている。

「どういう風に彼を“覚醒”させるおつもりなのかしら?」

同じくサンタの格好の女が言った。しかし、女の服装はミニスカートで、白くてスラリとした足が大胆に見える格好だった。
男は女のセリフにクスリと笑う。

「すでにあるだろう?」

「はあ? まさか、大天使様を使つつもりなの?
「やむを得んだろう」

言葉のわりにはやけに楽しそうな声で男は笑う。

「北川冬子には、犠牲になつてもいい」

……。

「疲れた……」

俺は砂漠で水も飲まずに迷っている放浪者のよつなザラザラ声で言った。

最初こそライバル意識していた冬子とアリスは、町巡りをしていくうちに仲良くなっていたのだ。
あまりの元気っぷりに振り回され、へとへとに至った。
晩頃になり、アリスの携帯が鳴った。
メールらしく、耳に当たず画面を見つめていた。

「そろそろ集まれってさ」

そう言い、アリスは携帯を閉じた。

疲れ果てた身に、ゲームをする体力は残っているだろ？
いや、動いている間に膝を着くこと間違いなし。

「たっくん、もうすぐだね」

心なしか、冬子の声が震えていた。
確かに寒くなってきたしな。吐く息も白い。

「うわーん、寒いよ琢磨！」

アリスが抱きついてきた。

「ずるいよアリスさん！　たっくん～！」

負けじと冬子も抱きつく。

暖かい。暖かいけど、周りの視線が痛い。

美少女一人もはべらせた冴えない高校生なんて構図、ラノベでし

か見たことないな。

三人でゲーム会場の前に行き、点呼が始まる。全員が揃つたと分かると、リーダーのケージを先頭にして、会場の中に入つて行つた。

しかし会場と言つても、古びた小さなゲーム屋だ。一列に並ばないと入れない。

狭さを我慢しながら奥へ進むと、地下に続く階段があつた。更にそれを降りる。

長い階段を降りていくと、開けたところに出た。

「ルリは……？」

そこには筒形の巨大なケースと、かなりの量の手袋が置いてあつた。

俺がこんなにモテるわけがない（後書き）

モテたいね

彼に必要なのは私じゃない（前書き）

——北川冬子、彼女はとある理由で生を受けた。

——彼女自身はそれを自覚している。

——ゆえに、現実は残酷だったのだ。

彼に必要なのは私じゃない

並べられた手袋の一つを手に取る。手の甲には摩訶不思議な模様が描かれ、手のひらには円がある。

妙な感じがする手袋だった。いや、場所と言つべきか。手袋は床に置かれっぱなしだし、筒型の物以外にこれといった機械もない。

「あん？ 団体様か？」

その言葉で後ろを振り向く。

そこには、別の入り口から顔を出す中年ぐらいの男が立っていた。額髪は短く揃えられているが雑な感じで、見るからに冴えない。

「あなたは？」

「オレか？ オレはこのゲームの古参だ」

「古参？」

「かれこれ十年近くやつてるかな」

そんなに前からある大会なのか、ここは。

どこの広告にも無いし、きっとマニア向けの物なんだろう。

その中年男性が入つてくると、その後ろからぞろぞろとたくさんの人があつてきた。

自分が言うのもなんだが、モテてないんだなーという感じの顔ぶれだ。どの顔にも霸氣や元気のような物が無い。

「さて、何人集まつた？」

「ざつと二三百人ですかな」

遠くでケージとゲーム屋のオヤジが話していた。
三百人か。思つたより少なく見える。

「残つた時は何人かな」

「ゆとり世代で遊び気分の奴らじやあ、せいぜい保つて一日ですな」

そこまで難しいゲームなのか？

「一日で充分だ」

「確かに、今回はちと厳しくなりますからね」

いつもより難易度も高いのか？

初心者揃いの集まりである俺たちは大丈夫なんだろうか。
にしても、ケージの言いぐさからして、じいじの経験者みたいだな。
後で口ッでも聞いておこう。

「たつくん」

背中から冬子の声が聞こえた。

「保つて一日つて……」

振り向くと、おじおどとした顔の冬子がいた。

さつきの一人の会話が聞こえたらしい。たかがゲームでこんなに
怯えてしまつている。

「大丈夫だつて」

「でも……」

慰めても顔色を変えない冬子に、俺は精一杯に優しく言つ。

「冬子は、俺が死んでも守るから」

その言葉を言った直後、冬子の肩が跳ねた。
驚いた顔のまま固まってしまった。

……。

「保つて一日つて……」

この戦いは、彼を目覚めさせるための洗礼のようなものだ。
そのために、ここにいる。

保つて一日。その言葉が、無性に私の胸を搔いた。不安で圧迫される。

彼を死なせるわけにはいかない。

「大丈夫だつて」

優しく語りかけてくる彼の目をまともに直視できない。
これからは彼の運命の予定表さえ狂わせた未来だ。

「でも……」

それでも不安を拭えない私に、彼は一瞬困った顔をしたが、すぐに笑顔になる。

そして、優しく言った。

「冬子は、俺が死んでも守るから」

その言葉を聞いた瞬間、胸がざわつき始める。

小学生の時にも彼から聞いた言葉だ。今でも覚えている。あの時も、こんな優しい顔だった。

心臓が高鳴る。

ありきたりな言葉。アニメや漫画の誰もが言ひよつた定型文はずなのに。

彼の口から出た途端に、心臓が張り裂けそうになつた。

私はそんな存在じやないはずなのに。
こんな感情、持つても意味無いのに。
彼とは、結ばれないのに。

「大丈夫か？」

彼が私の肩を揺さぶる感覚で我に帰つた。
でも開いた口はなかなか塞がつてくれない。

「おーい、冬子～？」

彼の暖かな手が、外気で冷えた私の頬に触れる。
暖かい。

「嬉しい……」

つい出てしまつた。

「守つてね、たっくん」

本心なはずだ。

この言葉は、私の腹の底から思つた言葉なんだ。
だけど、言つた途端に胸が苦しくなつた。

……。

「集まつたか」

冬子と話していると、巨大な筒型のケースの前に、軍服の男が立つていた。

その男は、先ほど置いてあつた手袋を右手にはめてくる。

「諸君らは、『幸せ』になりたくて来たのだな？」

最初こそ苦笑しながら見ていたが、その男の言葉に、少しずつ「オー」という声が混じり始めた。

「なら、サンタから奪いとれ。すでに幸せを謳歌する者たちに、更に幸せを与えるような脣共から奪い取り、幸せになろう!…」

だんだん「オー」という声が大きくなつていぐ。

まるで、一瞬でこの場の全員が洗脳されたかのようだ。

「幸せを掴みたいなら、欲望に従順あれ! 少しでも迷うな!
殺すサンタに同情するな!」

これはきっと、狩猟のようなものなのだろう。

サンタはあくまでも狩るべき鹿であり、俺たちは獵師なのだと。

「心の準備が出来た者のみ、そここの手袋を一つ手にして、この《パンドラ》に乗り込め！」

「パンドラ？」

不幸や罪悪とかいう負の感情の込められた中、一番奥に希望が入っていたとかいう箱か？

確かに、不幸な者がここに来て、奪い取るという罪悪感を乗り越え、希望を手にする、という意味なんだろう。そういうことならバツチリのネーミングだ。

周りが続々と手袋を手にし、《パンドラ》へと入っていく。入った途端にその体が一瞬で消えたのを見て、ギョッとした。

「わ、私たちも、行こうよ」

「あ、ああ」

俺と冬子も手袋をはめて、《パンドラ》に乗り込む。一瞬、目の前が真っ白になつたかと思うと、見慣れた物が正面に現れた。

「地上？」

そう。先ほどの場所の上、つまり地上。景觀に新鮮さが無いなどと俺が酷評していた場所だ。

辺りを見回すと、異質な建物が目に入った。
見るからに教会なのだが、大きなステンドグラスの絵はどれも不気味だった。

悪魔みたいな奴が天使のような奴を串刺しにしている絵。金に溺れた男の絵の隣に、骨に溺れている虚ろな目の中の男の絵がある。

「ひつ」

隣に立つ冬子が小さく悲鳴をあげた。顔を見ると、歯が噛み合わないのか、力チカチカチと歯を鳴らしている。肩もブルブルと震えている。

その様子を見て、単に寒さに震えているだけじゃないのを知る。

「大丈夫か？」

「だ、だだだ大丈夫ぶぶぶ」

大丈夫な気がしない。

顔も青ざめている。

冬子が歩き出したので、俺も横につきそいつ。

「全員揃つたようですね」

すでに開かれた教会の扉をくぐると、先ほどとは違う軍服の男の中にいた。

「じゃあ、まずは説明をしましよう。と言つても簡単です。武器を言つだけでオーケー」

そう言つて、男は手袋をはめた右手を上げる。

「MK22」

その声が響くと同時に、手のひらから拳銃が現れる。

「！」のようになります。まあ、銃の種類が分からない方は、ハンド

ガン、ショットガン、アサルト、ライフルとお呼びください」

音声対応の機械なのか？

いや、その前に、ここはバーチャル世界なのか？ いつの間にか違う世界に飛ばされているし。

バーチャルにしては情景がリアルすぎる。他の人間の顔まで鮮明だぞ。

俺が手足をちらちら見ていると、田の前に立っている男が手をあげた。

軍服の男がその男を指差す。

「質問なんだが、ここはどこなんだ？ いきなり地上に飛ばされる、つてことはここはバーチャルなのか？」

ちょうど俺と同じことを考えている人間だつたらしい。
軍服の男はフフンと鼻で笑う。

「ここは別次元です」

は？

「正式には、次元で表すことは出来ません。ここは現実であつて現実ではない。極めて現実に近い他次元空間なのです」

聞いたこともないワードだ。他次元空間？ 極めて現実に近い？
つまり、ここは俺たちのいた現実じゃない？
周りがざわつき始めた。

「落ち着いてください。これはゲームなのです。お帰りの際は先ほど入ってきた時のように速やかに戻れます」

その軍服の男は言葉のあとに「しかし……」と付け加えた。

「三日間、この世界から出られません」

なんだって？

俺は軍服の男から田を離せないでいた。
血の氣の多い奴らが騒ぎだす。

「ふざけんな！」

「俺なんかホテルとつたんだぞ！」

「わたしの寝るとこは決つなんのよー。」

「なんとか言えやーー。」

罵詈雑言が飛び交う。

だが、そんな喧騒も、すぐに治まる。

「「うぬせこですねえ」

軍服の男が取り出した拳銃で、男の近くの人間の頭を吹き飛ばしたからだ。

びちゃびちゃという気持ちの悪い音がよく聞こえた。
また騒ぐが、男が銃口を向けると、ピタッと止まる。

「それで良いのです」

男は一いつ笑い。

「欲望こそが、この世界の、あなたたちの力になります。じゃないと、サンタ共に、先ほどこのわたくしが撃ち抜いた人間のようにさせられますよ」

恐怖で体が固まつた。

「ふーん。そろそろ時間ですね。皆さん、心配はいりませんよ。サンタの持つ幸せの袋さえ手に入れられれば良いのです。そしてここに逃げれば、サンタ共はあなたたちを追ってきません」

そういう問題なのか？

こんな簡単人が死ぬところで三日間も生き延びると言つのか？
これじゃ、幸せの袋を手に入れるビンゴじゃない。

「サバイバルゲーム……。本物のサバイバルゲームじゃないか……！」

彼に必要なのは私じゃない（後書き）

聖母マリアは、キリストを処女のまま身につけておいたといつ。

うん、ただそれだけ。

めちゃくちゃ痛いんだろうな、と思つただけ。

これはお前たちの知る現実じゃない（前書き）

天使か悪魔？

宗教か何か？

いや、違うね。

宗教なんて小さな物じゃ表せないんだ。

そう、これは天使と悪魔の戦争。

「これはお前たちの知る現実じゃない

一瞬の、壮絶な光景がこれから起じる未来を勝手に連想させる。
死ぬ。

間違いなく、死ぬ。人が死んでいく。
不安感が胸の底から込み上げてくる。

「あ……が……」

息を吸うたびに喉からイカレた音が鳴る。何かが詰まってしまつ
ているかのようだつた。

辺りは水を打つたよつに静まり返つたが、そのほとんどが恐怖で
肩を震わせている。

「主催者さんよお」

一人の男が恐怖にも震えず、呑気な声をあげた。

「やつさんと始めてくれねえか？あと、その死体も生き返らせて
や！」

何を言つてゐのか、琢磨には理解できない。
生き返らせる？

「それもやうですね」

主催者と呼ばれた軍服の男は頷いた。

「じゃあ、そろそろこいじょつね」

その主催者の指が鳴る。

と同時に死体に、まるで動画を巻き戻したような動きで散りばつた肉片がくつついでいく。
死体には、砕けた跡も残らなくなつた。

「あ、あれ……」

その死体が声を発した。

あまりにも氣味の悪い物を見て皆の悲鳴が響く。

「さてさて、これで心配はいらないでしょ？ 恐怖なんていらないんです。欲望だけを持てばいい」

手品？ マジック？

いや、そんな物には見えなかつた。
明らかに、異世界の力。

「いつもいつも同じネタばっかで飽きたぜ。次は胴体切断にでもしてくれよ」

「ふふ、いいですよ。やつちも面白そうだ。来年も来てくれるのなら、見せてあげますよ」

「どうだかね。来年に来るかどうか……」

「十年も生き延びたゴキブリのような方が何を……」

十年？ ああ、あの男は、ここに来る前にいた冴えない男か。
こんな非現実的な光景を見て笑える度胸、さすが古参。
いつの間にか平静を保てる自分がいた。
危機が去つたという安心が心にゆとりを持たせてくれる。

「さて。そもそも彼らも近づいてきたので、お手持ちの手袋から武器を呼び出してください」

その声でそーり中から、ハンドガンやら、ＳＶＤだとか、見事にバラバラの声が聞こえてきた。

俺も自分の手袋に向かつて声を発する。

「AK-47」

サバイバルゲームやシューティングゲームにも馴染みのある名称を言った。

手袋の上にずつしりとした感触と、見慣れたフォルムのアサルトライフルが姿を現した。

「うわあ」

感動と興奮で胸が高鳴った。

今まさに、憧れの銃を手にしたといつ実感は、心の中にくすぐつたさを呼ぶ。

サバゲー好きなら尚更だ。

「たつ、くん……」

冬子のこひえたような声が聞こえた。

見ると、やたらにデカい銃を両手で持っている。マシンガンだろうか。

普段は腰に据えるタイプの物で、撃てる数と威力も大きいが、その分だけ重量と反動も大きい。

「冬子、それ止めといたら？」

「うふ……そ、わづかぬ」

ハンドガンを地面に落とした。

「ふう……。なにがいいのかなあ。ソレこのわいぱり分からないし……」

「ハンドガンか、サブマシンガンにした方がいいね。軽いし扱いやすいよ」

あーあ、何言つてんだかな俺。

今から始まるのは死ぬこともある本物のサバイバルゲームなんだ。こんな呑気に会話するよつたな状況じゃないのに。

「じゃ、サブマシンガン！」

その声と同時に、銃身が横に短く縦に長い銃が現れる。

「M10か。これもお馴染みだね」

「へえ、そんな名前なのね」

「うん。どのゲームでも扱いやすい仕様だし、コンパクトだから持ち運びも便利なんだよ」

「」「コンパクト？ 確かに小さいけど……、これも重いよ……」

「銃つてたいがい重いよ？ なんなら、ハンドガンにする？」

「ううん、いい」

そう言つて、冬子はやせ我慢しながら首を横に何度も振つた。
かく言つた俺もやせ我慢してくる。

「わあ壁か……」

主催者が声を裏返させて叫んだ。

「スタートです！三日間生き延び、幸せの袋を入れた者は現実世界で億万長者にも、大企業の社長にだってなり放題！！」

ちと大袈裟な気もするが、なんだかワクワクしてきた。

そのワクワク感はきっと、まだこの現実を受け止めきれてないからなんだろう。

主催者の持つMK22が甲高く鳴り響くのを合図に、その場にいた全員が散り散りに駆け出した。

……。

「サンタ、か

桜庭琢磨と冬子は東京タワーの見える方向へと行った。先の言葉は、二人と同じ方向に付いてきた男の言葉だ。

「君ら、カップルかい？」

その男が声をかけてきた。

随分な余裕だな、と思うと同時に照れた。

「ええ、まあ

「そうか。なら、彼女のことば死んでも守りぬけ

「は、はい！」

「ふつ。そうだ、名前を教えておこうか。オレは和田孝治わだこうじ

「桜庭琢磨です。彼女が、北川冬子」

血口紹介をすると、冬子が頭を下げ、孝治も頭を下げた。

「ま、名前なんか知つても助けてやれないがな」

笑つて言つ孝治に、俺もつられて笑う。

「俺だつて、助けられるほど余裕があるか分かりませんよ」

「ヒヒ、と笑い合つてはいるが、孝治が口に人差し指をあて、「しつ」と言つた。

口をつぐむと同時に、辺りを警戒する。

キヨロキヨロと視線を飛ばしてはいると、空に一つの影が見えた。

「あれがサンタか」

孝治も氣づいたらしい。

よく目をこらして見ると、トナカイがソリを引っ張つていて、そのソリにサンタが乗つている。

「かあ……。絵本通りの格好なんだな」

まさにそれだ。

赤い服に赤い帽子。白い鬚は生えていないが、一目でそれがサンタと分かつた。

「いいからなら撃ち落とせ——」

孝治は言いかけて、途中で止めた。

「そこか！！」

そして何も見えない暗闇に向かつて引き金を引いた。
何かに当たった反応は無かつたが、すぐに何かが飛び出してくる。

「トナカイか！？」

立派な角を生やしたトナカイがこちらに迫ってきたのだ。
そのトナカイの後ろで数人のサンタがこちらに歩いてくる。
サンタはどいつもこいつも大きな袋を背負っている。

「撃て！…」

孝治の言葉で引き金を引く。

だが、どの弾もトナカイに当たり、奥まで届かない。
弾丸を何発も受けたトナカイは、少しグラグラと揺れた後、ぱたりと倒れた。

「よしつ…」

俺がガツツポーズを取るのもつかの間、数人いるサンタの一人が
小石を蹴った。

「がつ…！」

その小石は田にも止まらぬ速さで俺のAK-47に当たる。
なんとか手放さずに済んだが、手がヒリヒリと痛い。

「当たれ、当たれ！」

冬子はいつの間にかM10からAK-47に持ち替えていた。そして、ちょうどいい段差にAK-47を置いて構えている。固定砲台か、考えたな。

「はええつ！」

銃口を合わせて撃つが、相手は弾丸以上の速さで横に避けて近づいてくる。

ゲームの経験なんて意味が無い。

苦渋で顔が歪んだ。

「またトナカイが来たぞ！！」

冬子を真似して、孝治はマシンガンを段差に置いて撃っている。現れたトナカイは完全に武装していた。体中に金属の装甲を貼り付け、肌が見えない。

「ほお。じんなとこにいたか、トップヘブン」

ゾクッ、と嫌な感じがした。

その声はマシンガンの銃声よりも体に響いてくる。

「探したぞ」

数人のサンタの後に、明らかに他との違いを強調する気配を身にまとったサンタが現れた。

そのサンタは胸元のチャックを開けて、中のシャツがぴっちりと張り付いている。そのせいでいくつにも割れた腹筋が露わになっていた。腕も太く、筋肉隆々という言葉が何より似合いそうだ。

「か、幹部！？」

背後から声が聞こえた。

とつさに振り向くと、同じく筋肉のある男が驚いた顔のまま固まっていた。その体には、右腕がない。

「ほお。お前は去年、わたしが腕をもぎ取った男じゃないか」「て、テメエ……！」

忌々しげな声のあと、背後の男は俺の横に陣取り、片手でサブマシンガンを構えた。

「……」
「（）で右腕の借り、返させてもらひり……」

「無様に逃げ帰った愚か者が何を言つか

男はためらいなく引き金を引いた。

耳をつんざく高温の後、銃弾が全て筋肉のサンタへと当たった。しかし、当たっただけだった。

「無駄だ」

そのサンタは体に傷一つ付いてはいなかつた。服にすり、銃弾の跡は無い。

「ぐつ、あああああつ……」

男は引き金を引き続ける。

だが、それでもまだ迫つてくる。

「早く撃て！！ 逃すな！！」

男が俺に振り向いて叫んだ。

だけど、腕が震えて仕方ない。

恐怖か？

全くダメージの無い相手への恐怖か？

「おい、新人！！ ボサツとしてんじやねえ！！ 幸せは分けてや

らねえからな！！」

「は、はいい！」

そう。

ここまでが事の成り行きだ。

これはお前たちの知る現実じゃない（後書き）

天使に人々の作り出した利器は通用しない。
いや、それは極一部か。

天使の中でも幹部と呼ばれるふざけた奴らが正にそれだ。
奴らに銃弾は効かない。

逃げることが最善の選択なのさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7162y/>

俺たちのクリスマスは戦場でした

2011年11月29日22時46分発行